

Ⅲ. 令和3年の罹患概要

1. がんの罹患の集計について

(1) 集計の期間

令和3年：診断日が令和3年1月1日から令和3年12月31日までの1年間

(2) 集計の対象

法によって定められた届出対象となる新生物
(がん登録等の推進に関する法律施行令第1条)

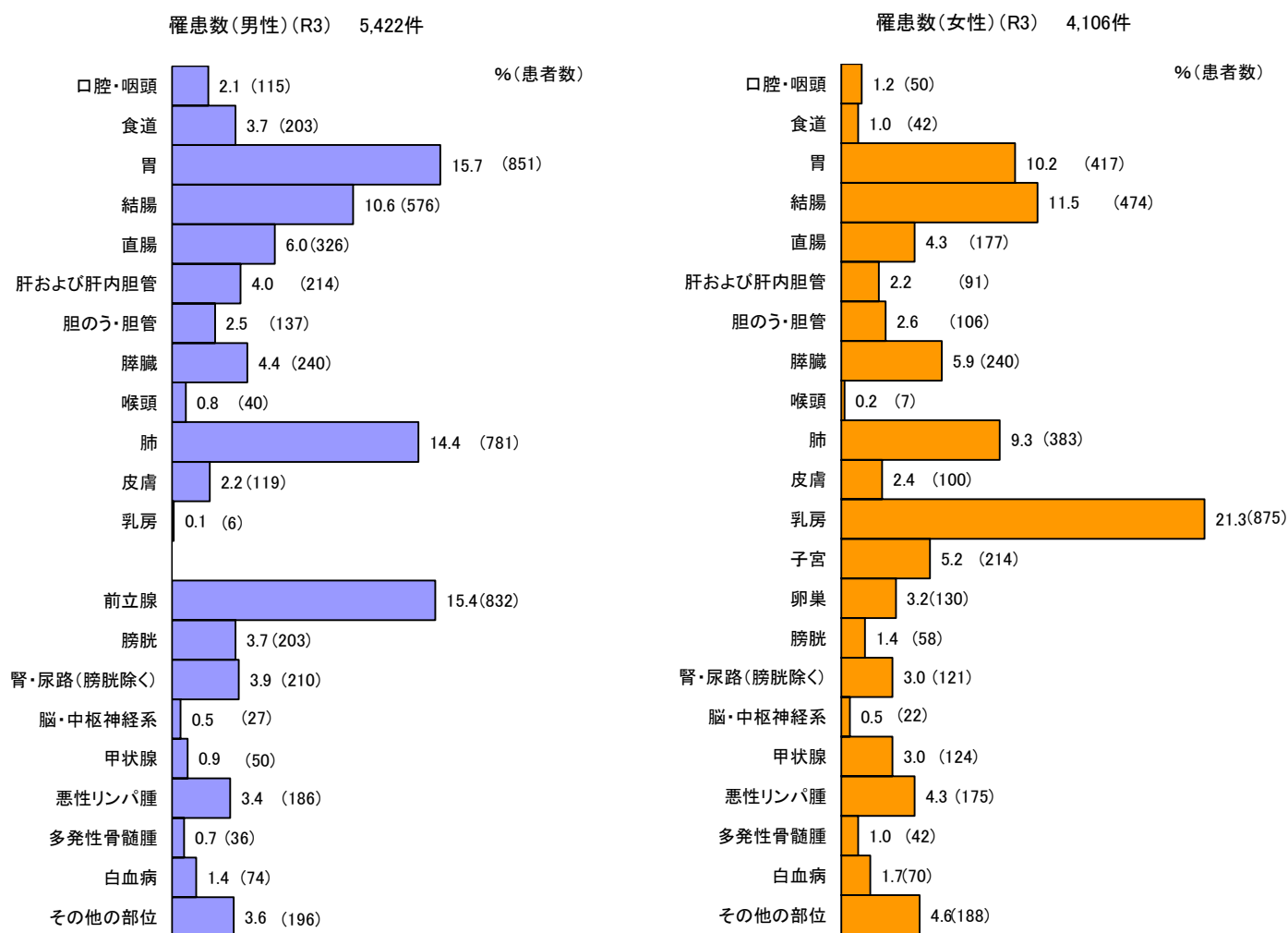
(3) 精度指標

	R3年
DCI	2.6%
DCO	1.9%
MI比	0.38

2. 富山県のがんの罹患の概要

富山県における令和3年のがんの罹患数は、男性 5,422 件、女性 4,106 件の合計 9,528 件であった。男性でもっとも多いがんは大腸（結腸・直腸）であった。2 位以下は胃、前立腺、肺、膵臓、肝および肝内胆管の順となっている。女性では、最も多いがんは乳房であり、次いで、大腸（結腸・直腸）、胃、肺、膵臓、子宮の順となっている。（図1）。

図1 部位内訳（R3年、表1-Aから作成）



3. 年齢別に見たがんの罹患

令和3年に新たに診断されたがんについて年齢別にみると、男女とも75歳以上が最も多く、次いで男性では65歳～74歳が、女性では40～64歳が多く、男性の8割以上、女性の7割以上を65歳以上が占めている（図2）。

15歳～39歳、40歳～64歳の年齢階級では男性よりも女性の罹患数が多く、その年齢階級の女性の部位別の内訳では、乳房、子宮の占める割合が高い。男性は、40～64歳では大腸（結腸・直腸）、胃の割合が大きいが、65歳以上では、肺、前立腺の割合も高い（図3）。

年齢階級別罹患率は、ほとんどの部位のがんにおいて、年齢が高くなるにつれて増加する傾向にある。男性のがんは50歳以上で罹患率が高くなる傾向にあり、特に胃、前立腺は55歳以上から、肝および肝内胆管、肺は60歳以上から急激に増加していた。女性では乳房が30歳以上で急激に上昇し、罹患率が高い状態は80歳代まで続いていた。子宮は、特に子宮頸部が25歳以上で急増するが、50歳代以上では減少する傾向にあった。一方、子宮体部は40歳以上で増加し、50歳代に罹患率のピークがみられた。若年の子宮頸部は、上皮内がんの割合が高い（図4）。

図2 年齢内訳(%) (R3年、表2-Aから作成)

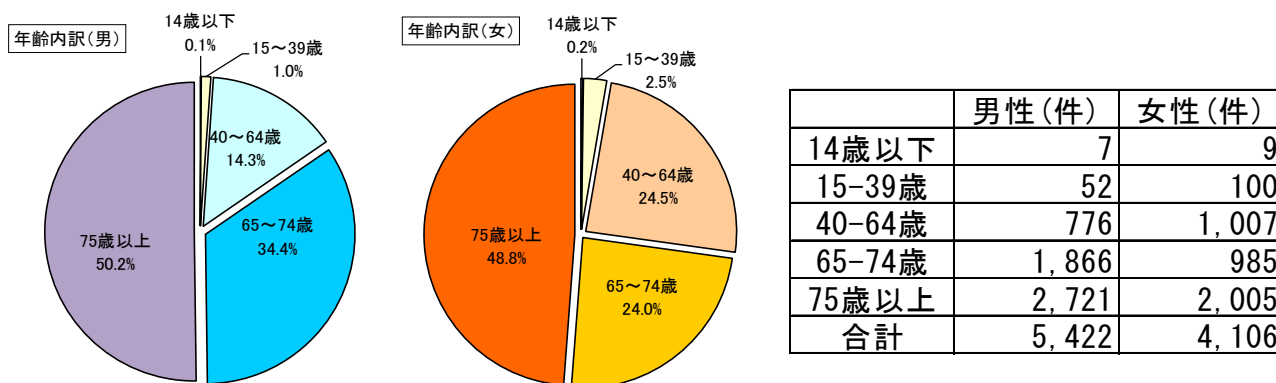
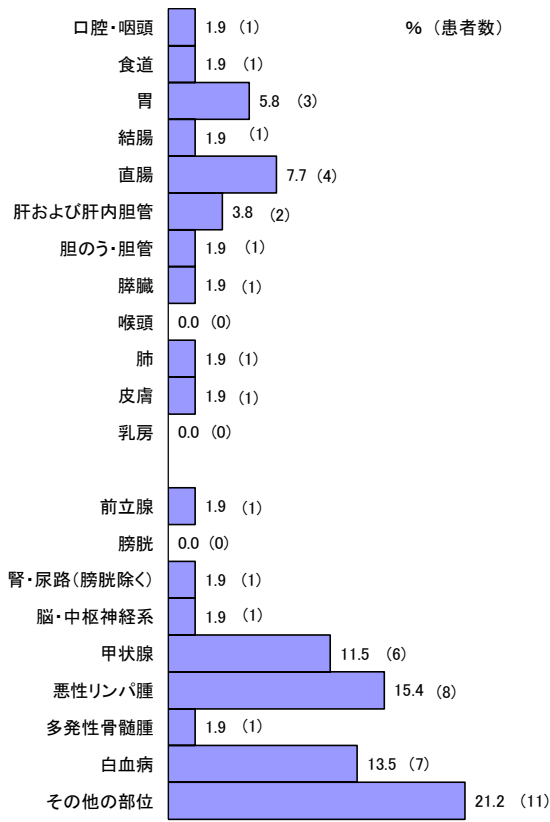
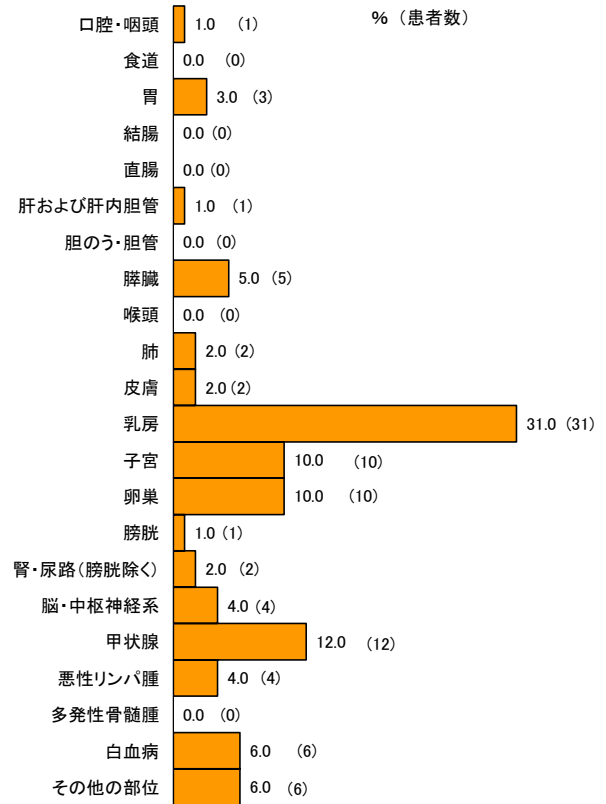


図3 年齢別部位内訳(%) (R3年、表2-Aから作成)

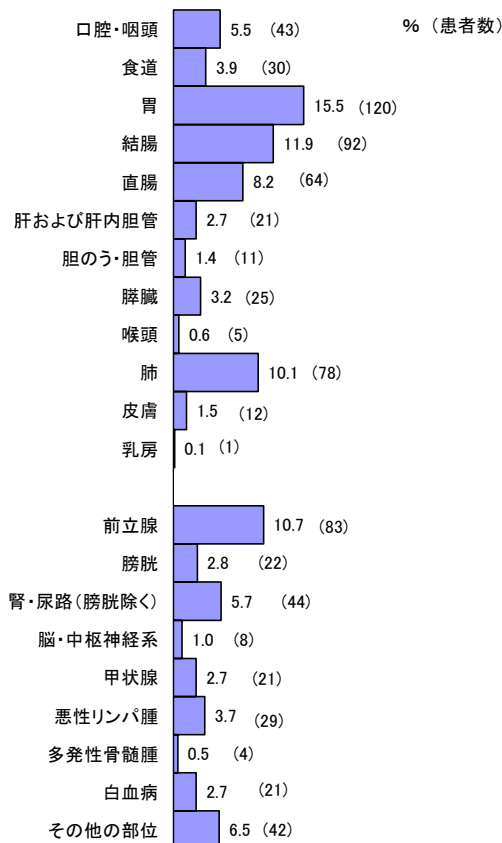
15歳～39歳罹患数(男性)(R3) 52件



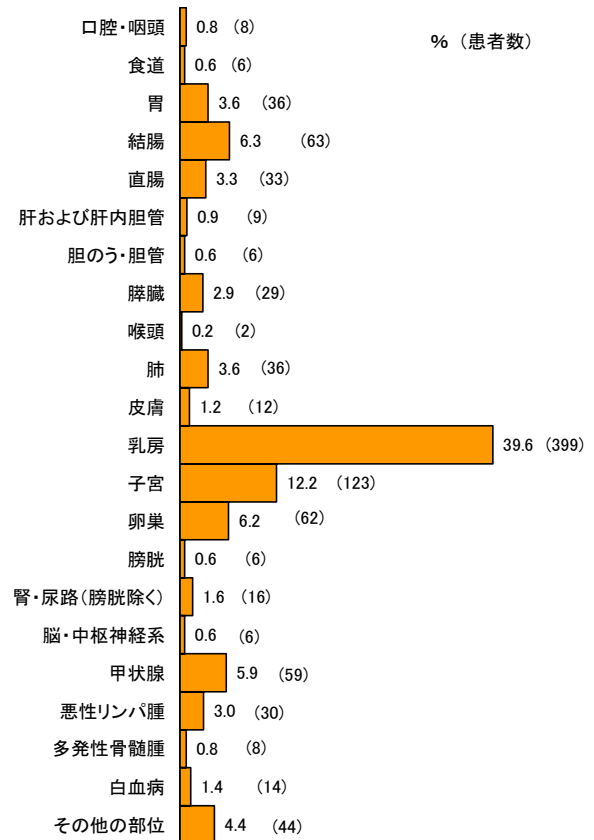
15～39歳罹患数(女性)(R3) 100件



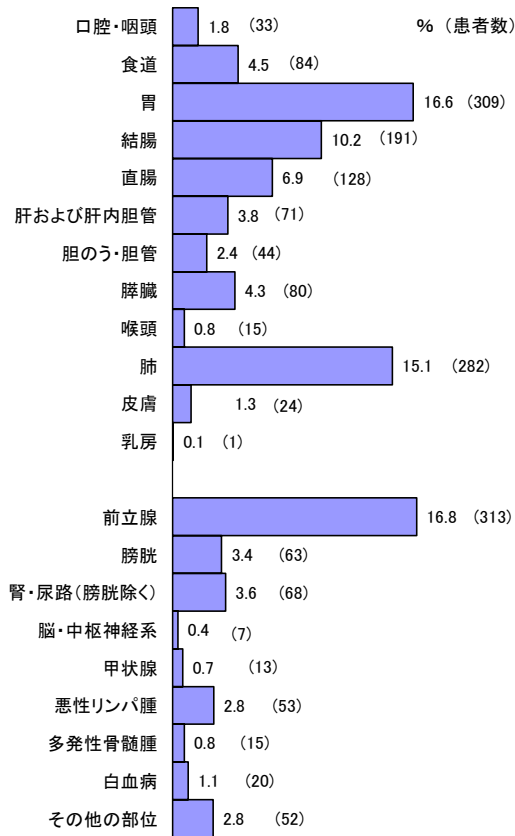
40～64歳罹患数(男性)(R3) 776件



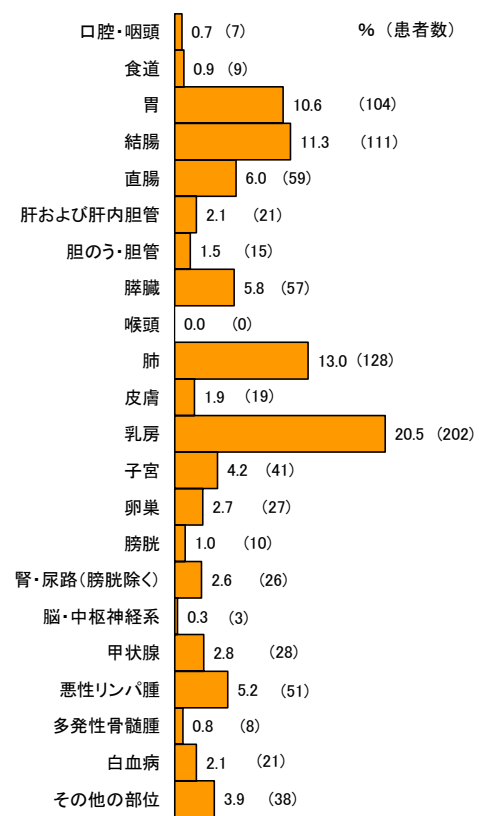
40～64歳罹患数(女性)(R3) 1007件



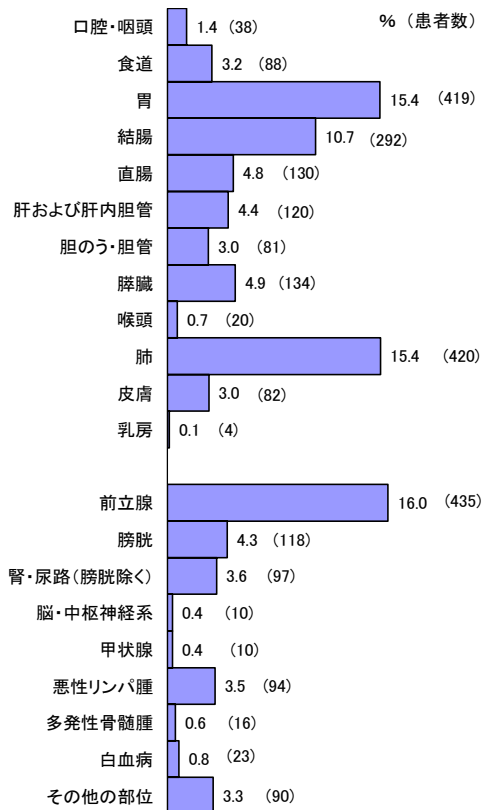
65～74歳罹患数(男性)(R3) 1,866件



65～74歳罹患数(女性)(R3) 985件



75歳以上罹患数(男性)(R3) 2,721件



75歳以上罹患数(女性)(R3) 2,005件

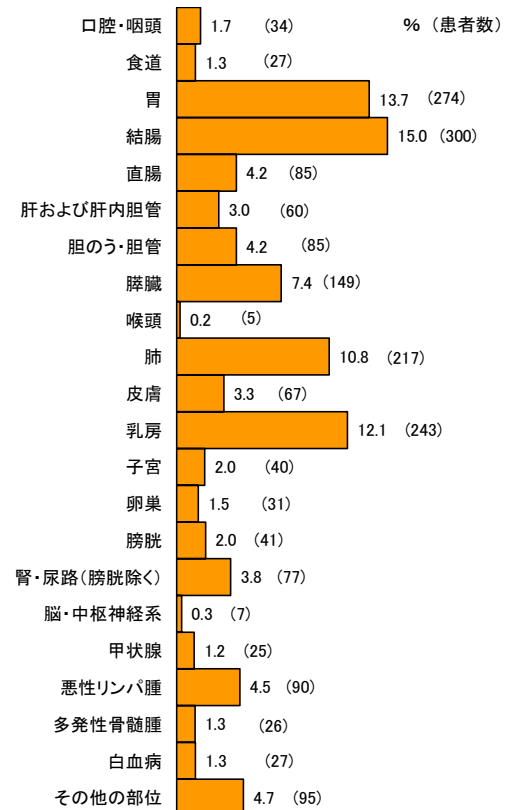
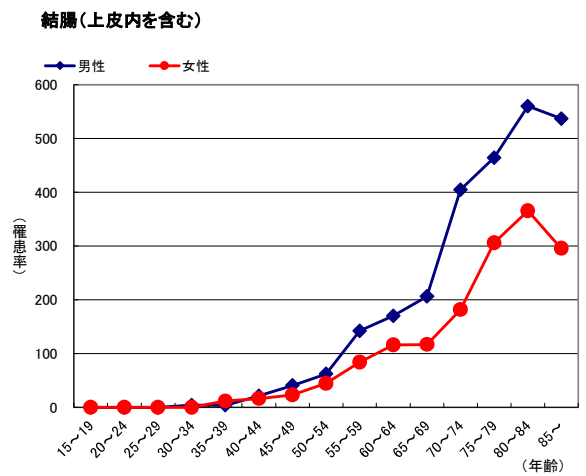
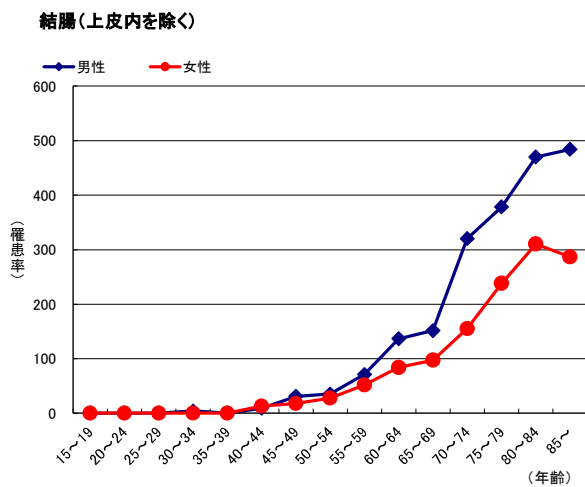
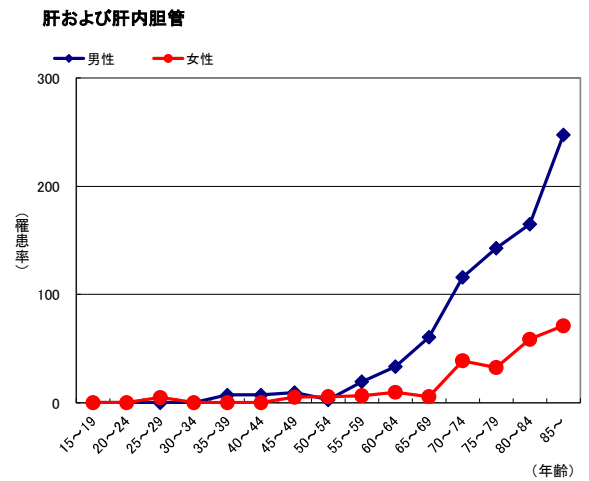
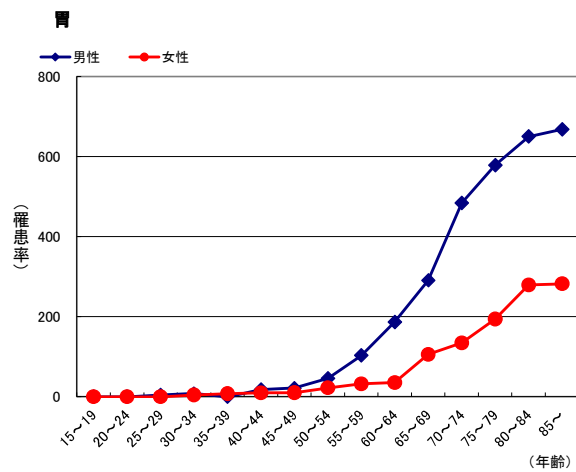
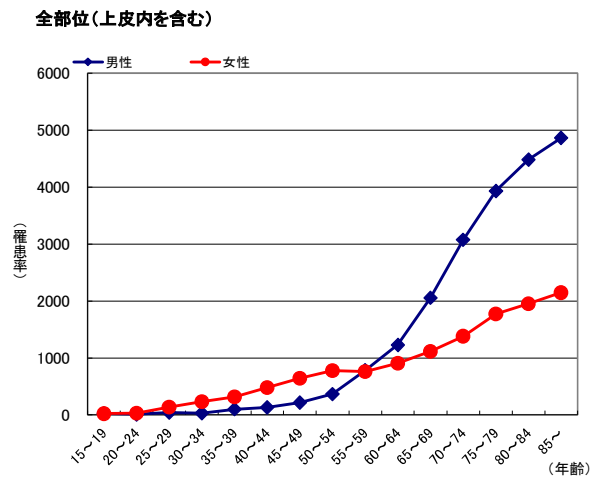
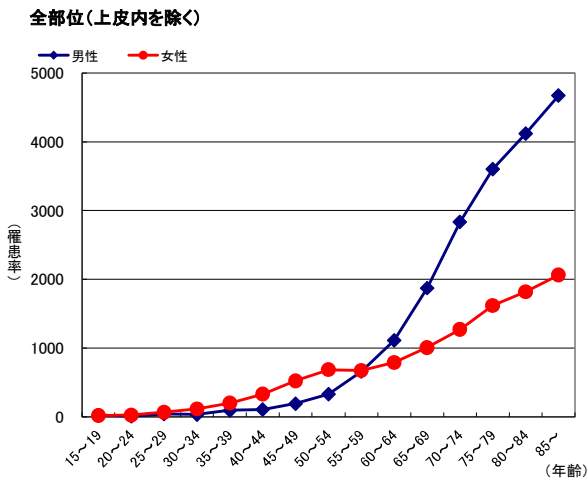
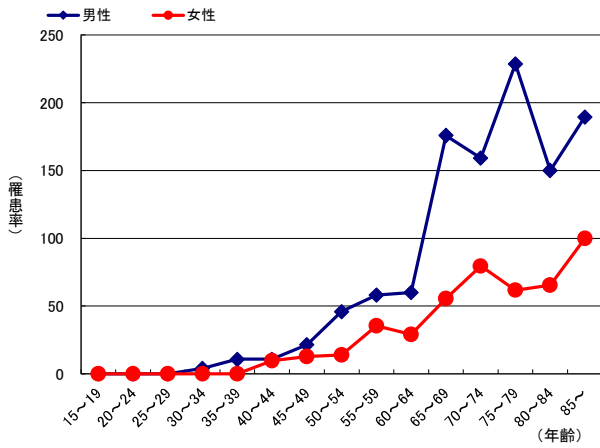


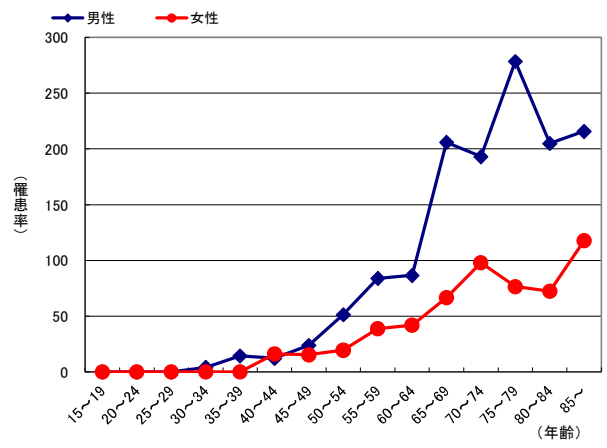
図4 部位別年齢階級別罹患率：人口10万対（R3年、表3-2-A、Bから作成）



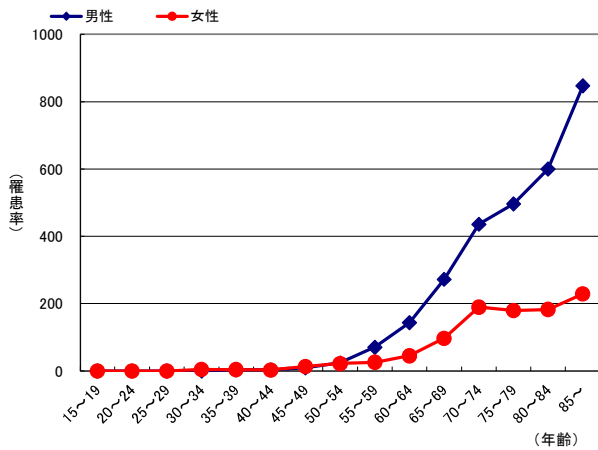
直腸(上皮内を除く)



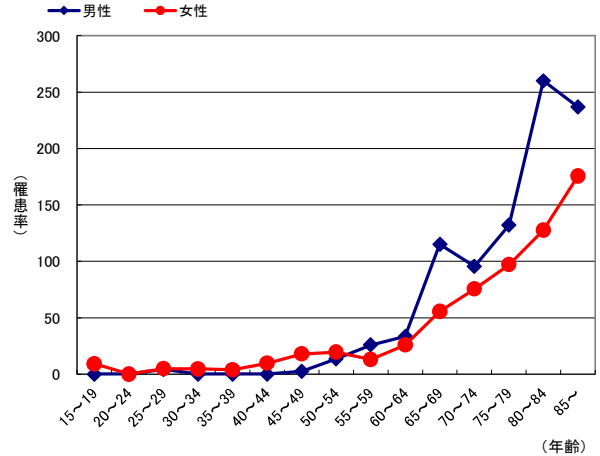
直腸(上皮内を含む)



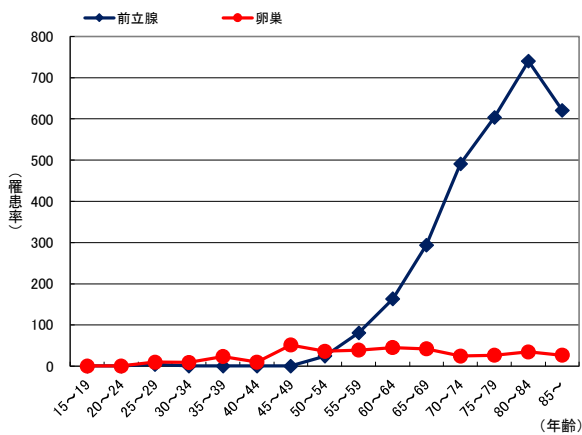
肺



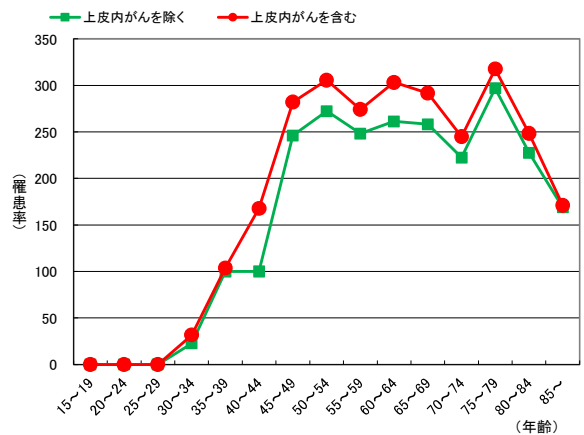
隣臓



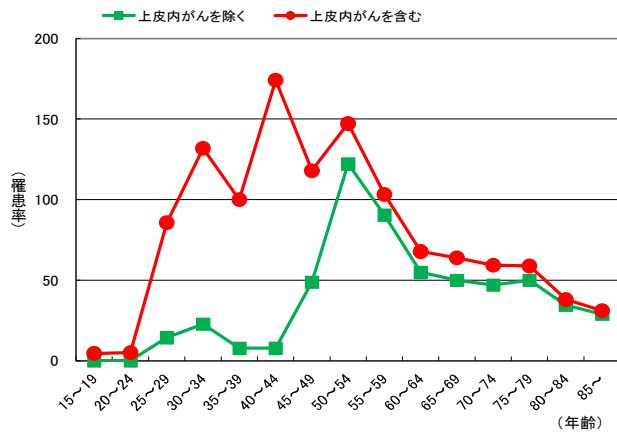
前立腺・卵巣



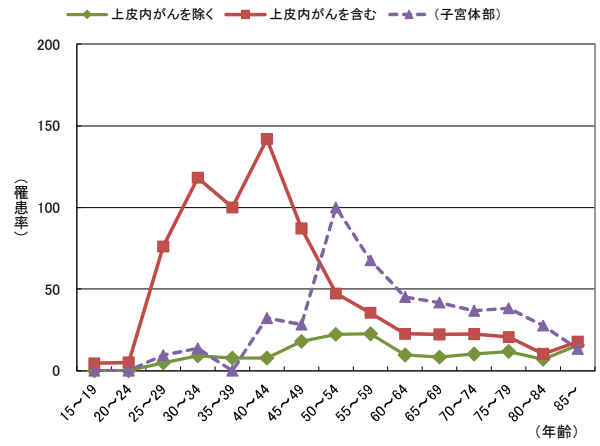
乳房(女性)



子宮



子宮頸部・体部



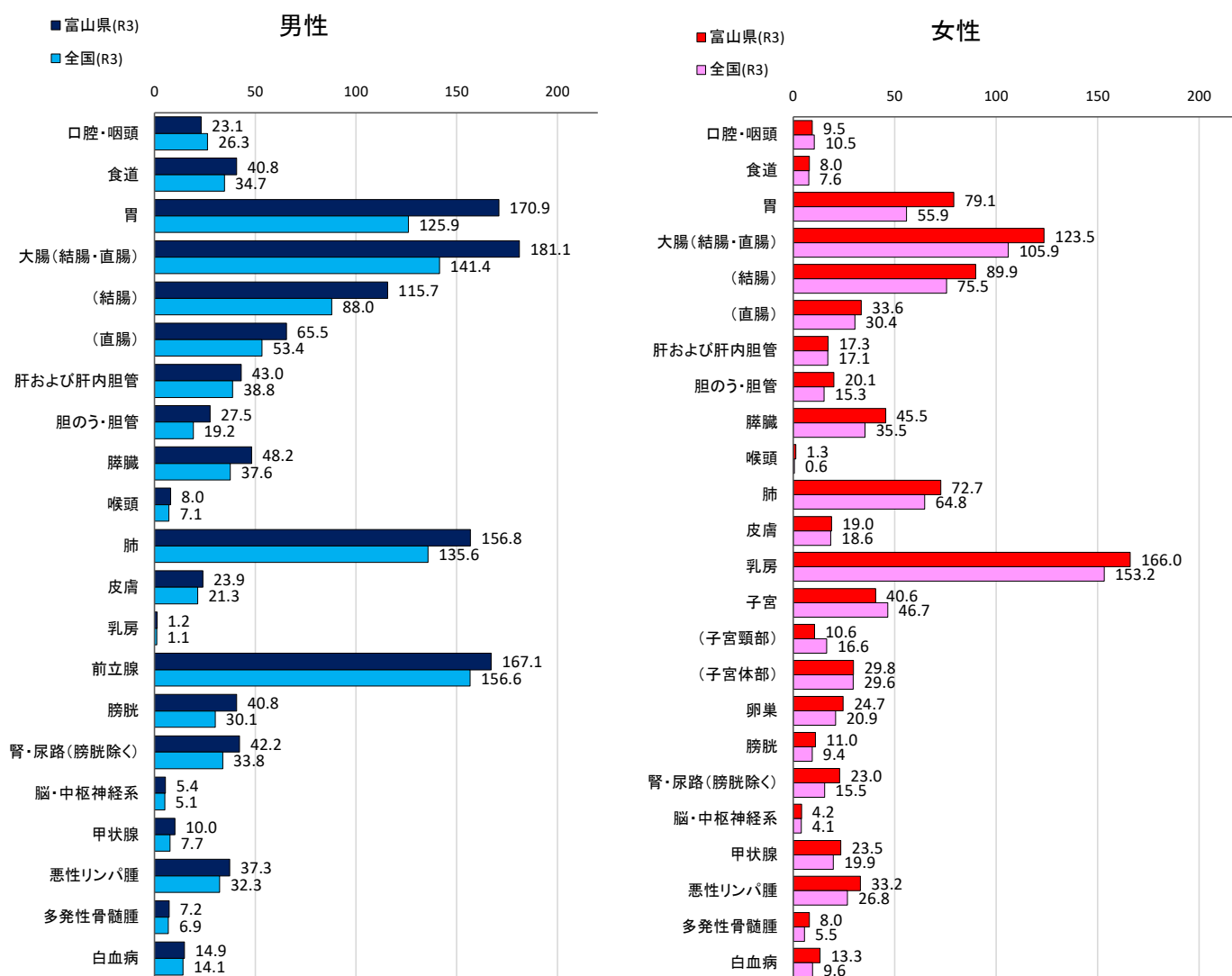
4. 富山県のがんの罹患の特徴

令和3年の部位別の粗罹患率と年齢調整罹患率について、各年の厚生労働省 全国がん登録罹患数・率報告において公表されている全国値との比較を示す。

粗罹患率は、男性は胃、大腸（結腸・直腸）、膵臓、肺、前立腺、膀胱、腎・尿路が全国値よりも高く、女性は胃、大腸（結腸・直腸）、膵臓、乳房、腎・尿路が全国値よりも高い（図5）。

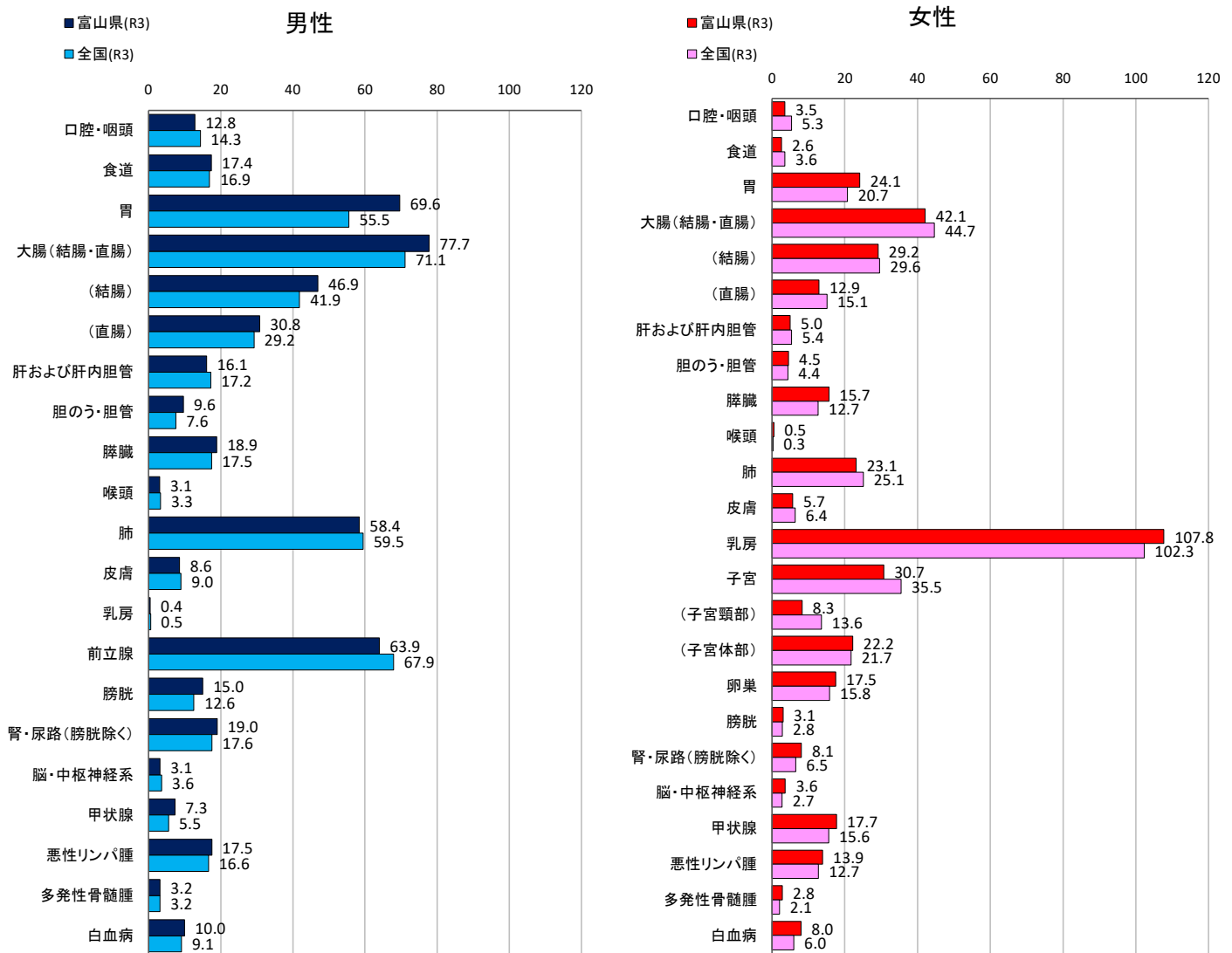
年齢調整罹患率は、男性では胃、結腸が全国値よりも高く、前立腺は全国値よりも低い。女性では、胃、膵臓、乳房が全国値よりも高く、大腸（結腸・直腸）、子宮頸部は全国値よりも低い（図6）。

図5 部位別粗罹患率：人口10万対（R3年、表1-Aから作成）



全国の値は厚生労働省「令和3年 全国がん登録 罹患数・率報告」より引用

図6 部位別年齢調整罹患率：人口10万対（R3年、表1-Aから作成）

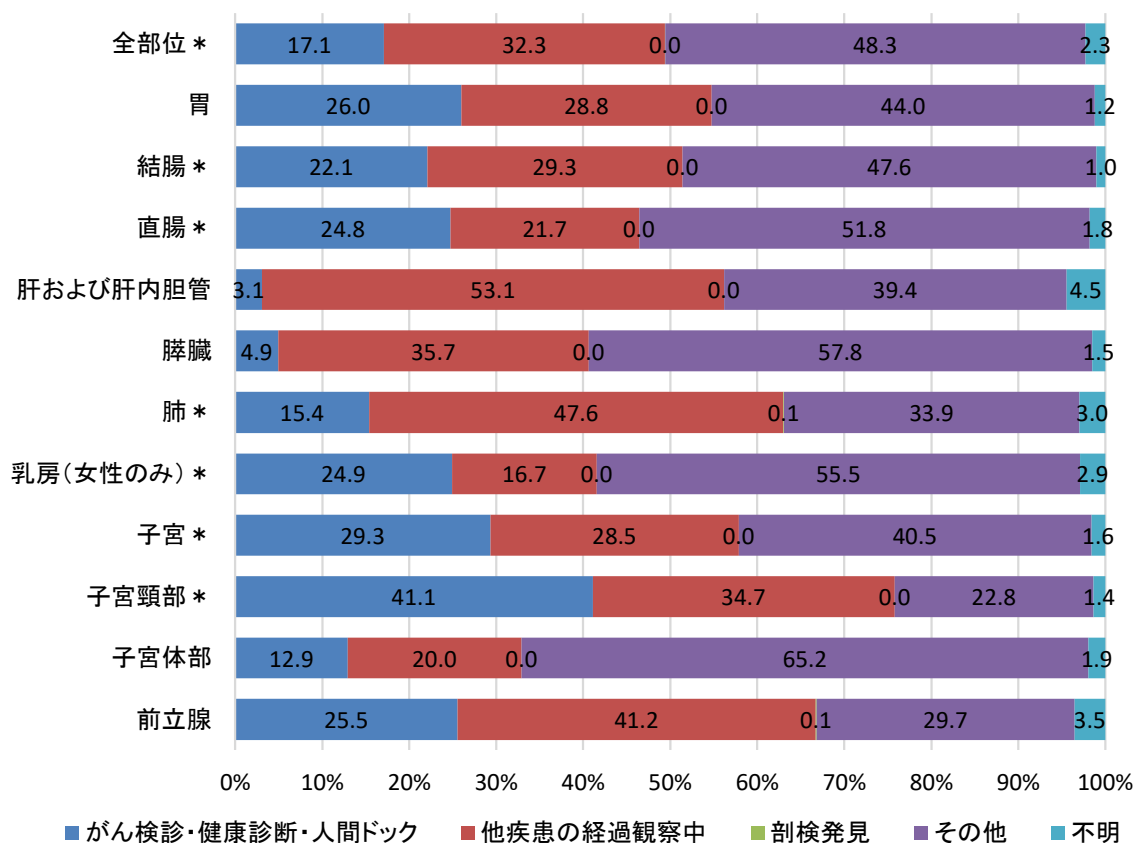


全国の値は厚生労働省「令和3年 全国がん登録 罹患数・率報告」より引用

5. 発見経緯

一般にがん検診が実施されている胃、大腸（結腸・直腸）、乳房、子宮頸部において、「がん検診・健康診断・人間ドック」が発見の経緯になった割合は、胃 26.0%、結腸 22.1%、直腸 24.8%、乳房 24.9%、子宮頸部 41.1%、前立腺 25.5%であった。子宮頸部を除き 30%以下であった（図 7）。

図 7 部位別発見経緯(%)：対象はDCOを除く届出患者（R3年；表4-A、Bから作成）

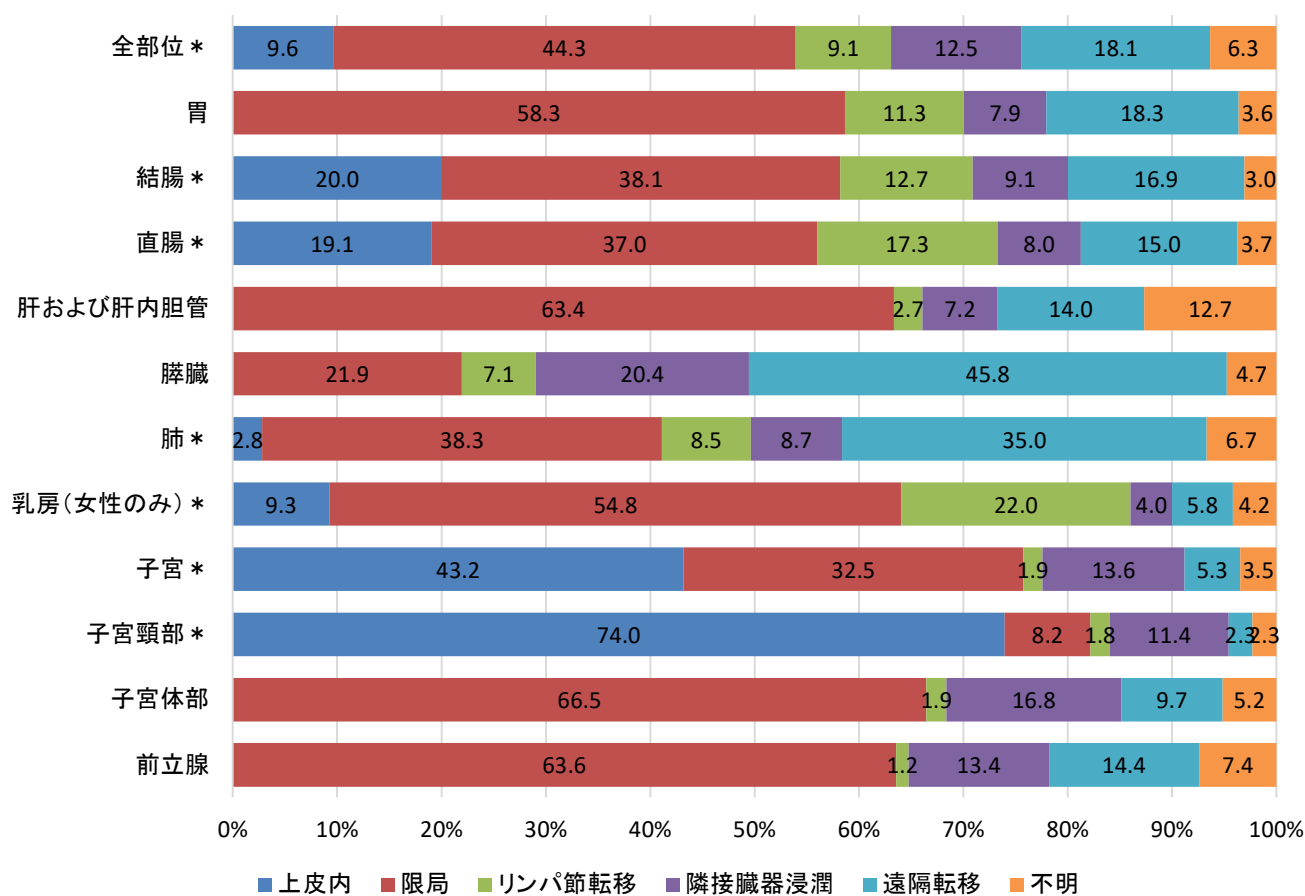


* 上皮内がんを含む

6. 病期

胃、大腸（結腸・直腸）、乳房、子宮頸部など、がん検診・健康診断・人間ドックが実施されている部位においては、発見時の病期が上皮内がん、限局がんの割合が高い傾向があった。一方、肺は、がん検診が実施されている部位ではあるが、発見時に遠隔転移があった割合が高かった（図8）。

図8 部位別発見時の病期(%)：対象はDCOを除く届出患者
(R3年；表5-1-A、Bから作成)



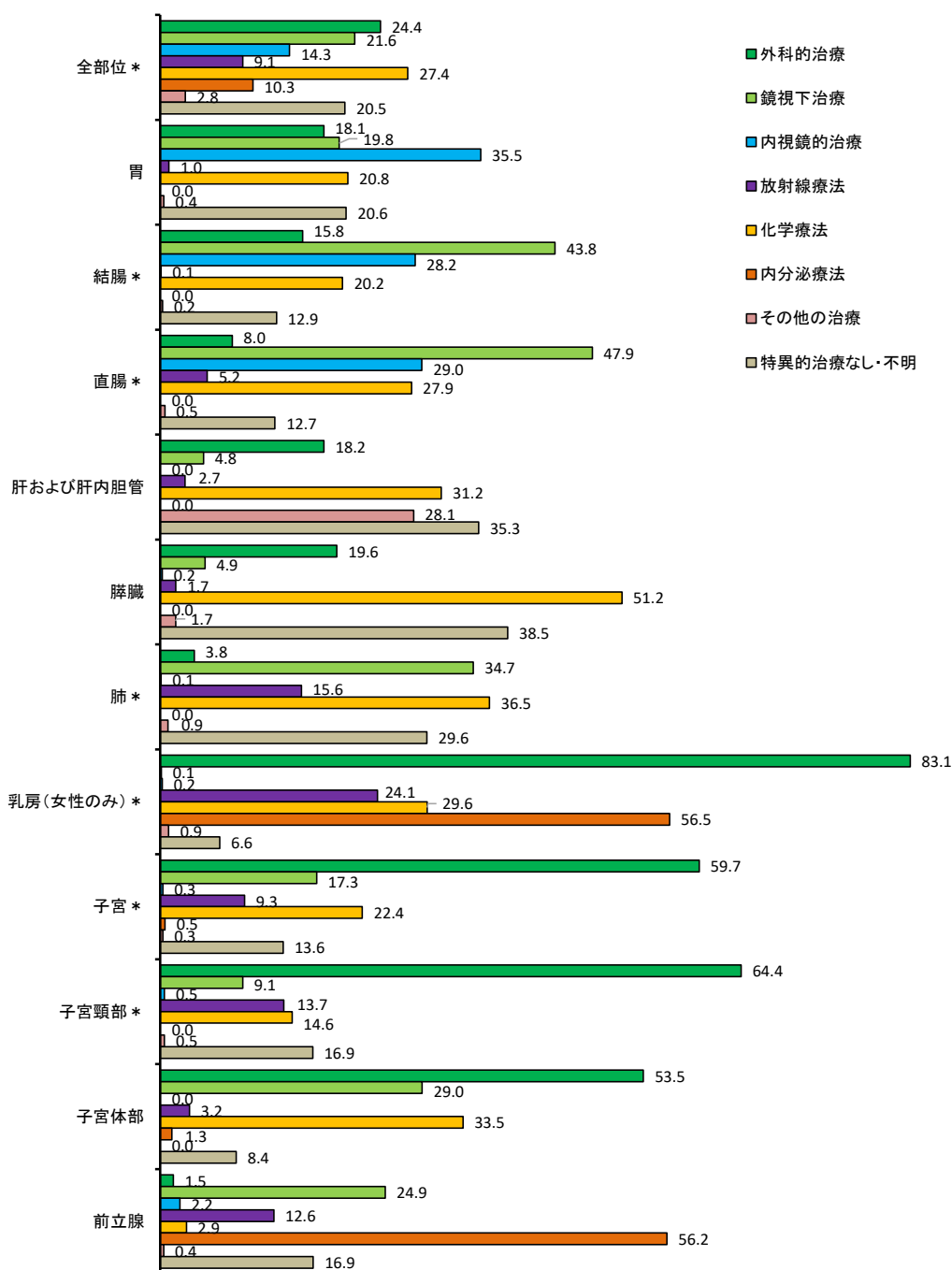
* 上皮内がんを含む

7. 初回治療の方法

初回治療は複数の方法が併用して行われることがある。外科的・鏡視下・内視鏡的治療が多く施術されている部位は、胃、大腸（結腸・直腸）、乳房、子宮であり、診断時病期の限局の割合が高い部位であった。

放射線治療は乳房で多く行われている。化学療法は肝および肝内胆管、膵臓、肺で多く、内分泌療法は、乳房、前立腺で多く行われていた（図9）。

図9 初回治療の方法(%)：対象はDCOを除く届出患者
(R3年；表6-A、Bから作成)



* 上皮内がんを含む